令和６年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 大宮北 高等学校 ）

学校番号　ｓ４９

目指す学校像	ＳＳＨ指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。

重点目標	
	１　ＳＳＨ指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 ２　自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 ３　北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 ４　地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。

達成度		
	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	概ね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

学校自己評価								学校関係者評価
年度目標					年度評価			実施日令和　年　月　日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	＜現状＞ ○昨年度、卒業生の９４％にあたる２９６名が大学に進学した。国公立大学に４６名、早慶上理、GMARCH に１２４名が合格した。特に埼玉大学に１７名が合格、既卒者から前年度に引き続き国立大学医学部医学科に１名合格し、国公立大学合格者は現浪合わせて５１名となり、開校以来の結果を残した。生徒の学力は着実に伸びている。 ○PTA 行事の「進学勉強会」に２８０名の保護者が参加した。 ＜課題＞ ○本校の課題研究型授業と大学受験を目指した授業展開のバランスが大きな課題である。また、生徒が自律した学習者となるために、教職員の探究的な学びの研修や生徒への進路面談、外部人材の活用など、指導方法の研鑽と共有が必要である。	高い「志」の育成と進路実現	①生徒の「志」を高めるため、進路指導部による計画的なキャリア教育を実施し、多様な外部人材を活用する。 ②自主学習を習慣化し、時間管理の意識を高めるため、朝学習への開始時間からの参加を促す。 ③学習の定着力を高めるため、補習（前期・長期休業・後期）を開設し、積極的な参加を呼びかける。 ④大学受験に対応した学びを一層深めるため、スタディサプリを活用する。 ⑤保護者と協力して生徒の大学進学を支援するため、保護者に対して最新の進路情報を発信する。 ⑥生徒の進路選択、進路実現を図るため、担任による二者・三者面談、校長面談を実施し、適切な助言を行う。	①外部講師や卒業生からの話により自身の進路選択に役立った３年生は８割以上である。 ②朝学習に開始時間から参加した生徒は全学年８割以上である。 ③年間４０講座以上の進学補習の開講し、３年生の進学補習参加状況は２割以上である。 ④３年生のスタディサプリの利用状況は毎月１，０００時間以上である。 ⑤学校からの進路情報の提供が役立ったと感じる３年生保護者は７割以上である。 ⑥面談や面接指導が自身の進路選択に役立ったと感じる３年生は８割以上である。				
2	＜現状＞ ○学校説明会の参加者は３，０００名を越え、多くの方々が来校した。志願倍率は普通科１．３９倍、理数科２．１５倍となり、学校選択問題実施以降、高い倍率となった。 ○昨年度、HP 更新回数は２１４回を越え、中学生やその保護者に最新の学校情報を提供した。 ○新学習指導要領実施３年目となり、各教科においての評価規準のたて方、保護者や生徒への周知の方法について、指導と評価の一体化を目指し、研究を進めている。 ○海外生徒を１２名受け入れたり、外国生徒と交流した本校生徒は３８０名を越えたりして海外交流を積極的に推進している。 ＜課題＞ ○物価高の影響を受け、海外との交流事業について安価かつ効果的なプログラムになるよう現地スタッフとの連絡・調整を行う必要がある。 ○全体・個人の well-being につながることを目指し、教職員の仕事のやりがいと負担軽減のバランスをどこに定めるか課題となっている。また、担当者の入れ替わりを考慮し、業務の引き継ぎを含め、さらなる効率化を図る必要がある。	開かれた学校づくり	①本校の教育活動への理解・協力を地域の皆さんに促すため、HP 等を活用して学校の情報を発信する。 ②受験生やその保護者が本校の教育活動への理解を促すため、学校説明会の内容を充実させ、本校への進路希望者を増やす。 ③外部から見た本校への評価・期待値を把握するため、学校運営協議会等を実施し、指導・助言内容を踏まえ、改善を図り、改善内容を保護者へ周知する。	①学校 HP がよく更新されていると感じる生徒、保護者は７割以上である。 ②本校の教育活動への理解が深まったと感じた学校説明会参加者は８割以上である。 ③学校運営協議会等での意見などが本校の教育活動の改善につながっていると感じる保護者が５割以上である。				
		国際交流の推進	①本校生徒と海外生徒と継続的な交流を図るため、留学生を積極的に受け入れる。 ②海外生徒との交流を推進するため、本校保護者に協力を仰ぎ、ホームステイを実施する。 ③本校のグローバル教育に対する取組を世界に発信するため、ユネスコスクールに登録される。 ④海外校との交流を推進するため、姉妹校提携を新たな学校と行う。	①海外からの留学生を２名以上受け入れる。 ②本校におけるホームステイへの登録者は１５世帯以上である。 ③本校がユネスコスクールに正式に登録される。 ④本校と海外校が姉妹校提携を新たに１校以上結ぶ。				
		学習環境の向上	①学習環境を向上するため、照明の LED 化、床の清掃・張替などを進める。	①照明LED化、床の修繕等により学習環境が整備されていると感じる生徒は６割以上である。				
3	＜現状＞ ○「自主・自律・創造」の校訓を意識して、多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。 ○タブレット端末を利用した効率的・効果的な指導方法を研究し、アクティブラーニングを推進している。 ○体育祭や文化祭などの学校行事で、生徒が生き生きと楽しんで活動している。 ＜課題＞ ○自転車事故件数を減らすこと、自転車ヘルメット着用率を今より高める必要がある。 ○教育相談が必要な初期の段階で、専門家と相談できる体制づくりを今より強固にする必要である。 ○学校生活の中で生徒が主体的に判断し、自信をもって行動できるような活動をもっと増やす必要がある。	安心安全な高校生活	①生徒が安全に登下校するため、自転車利用時のヘルメット着用やイヤホン未使用を呼びかける。 ②教職員の教育相談や特別支援に関する理解を深めるため、研修や情報交換を実施する。 ③ネットモラルの向上を図るため、インターネット安全教室の実施、ネットモラルの情報提供を行う。	①自転車利用の登下校の際は、ヘルメット着用、イヤホン未使用の生徒は５割以上である。 ②教育相談や特別支援に関する学びがより深まったと感じる教職員は８割以上である。 ③ネットモラルを意識してスマホやタブレットを利用している生徒は８割以上である。				
		ICT の強みを生かした授業での生徒支援	①生徒の学びを支援するため、ICT 機器を積極的に活用して授業支援や業務効率を図る。 ②生徒の読書習慣を確立させ、図書館を身近なものにするため、広報誌の作成、文学散歩などを実施する。	①本校は ICT 機器を利用した教育活動を積極的に推進していると感じる生徒は８割以上である。 ②図書館をよく利用している生徒は３割以上である。				
		学校行事の充実感	①学校行事で充実感・達成感を得るため、生徒が主体的・自主的に行事の運営、活動を行う。 ②生徒の生き生きとした活動を見てもらうため、学校行事の地域公開を推進する。	①体育祭や文化祭などの学校行事で主体的に活動できた生徒は８割以上である。 ②体育祭及び文化祭の来校者数は計２，５００名以上である。				
4	＜現状＞ ○第Ⅱ期 SSH は３年目、科学技術人材育成重点枠は２年目を迎える。 ○STEAMS TimeⅠは教員１７名、Ⅱは教員２０名が担当し、生徒は計８９本の研究発表を行った。第Ⅰ期 SSH と比較して課題研究の深さや広さ、対応教員の教科・科目が広がっている。また、理化学研究所や KEK、Spring8 など、専門的な機関で実験活動や講義を受講している。 ○国内 F.W に２０８名、海外 F.W に６８名参加し、学校外での学びを推進している。また、福島復興学は福島県内６自治体と連携して、生徒３４名がふたば未来学園や安積高校と交流した。 ○海外オンライン交流を１０回行い、計４８８名が参加した。本校の特徴的なプログラムとして「PROP２３のオンラインプログラム」は４カ国９校１１４名が参加した。また、「GC4S」は１２６名が参加した。 ○アウトリーチプログラムに小中学生が計１４７名参加し、近隣の児童が多く参加して小中高の連携を強固にしている。 ＜課題＞ ○さいたま市独自の「STEAMS TIME」について、１２年間のつながりを意識し、系統性、発展性を目指した授業を研究する。 ○海外の現地校とのお互いにとって充実したプログラムとなるよう、体験プログラムや事前研修の計画を立て継続的に実践する必要がある。	探究的な学びの推進	①課題研究を発展、深化させるため、STEAMS TimeⅠⅡⅢを複数教科の教員や大学教員が指導・助言することで、生徒の探究的な学びを推進する。 ②福島県の街の復興を応援するため、昨年度から継続して２年生全員が「HAMADOORI REBORN」を実施する。 ③社会とつながる学びを推進するため、多様なフィールドワークを実施する。	①課題研究を通して生徒自身の学びを充実させることができた生徒は６割以上である。 ②福島復興学を通して福島県や日本の現状について理解を深めることができた生徒は６割以上である。 ③フィールドワークに参加した生徒は延べ２５０名以上である。				
		グローバルサイエンスリーダーの育成	①発展著しい国での経験と学びを推進するため、今年度新たにインドサイエンス研修を実施する。 ②海外生徒と交流して英語を使う機会を増やすため、海外校とオンラインプログラム「GC4S」を実施する。 ③グローバルな課題を知り、解決しようとする態度を育むため、海外の高校生と共同研究を行う。	①インドでの学びを通して自身の進路選択や将来への考え方に影響を与えた参加者が８割以上である。 ②GC4S への参加者は１２０名以上である。 ③ハワイ、インドネシア、台湾、インドとの共同研究により、海外生徒とグループで学ぶ経験で自身が成長したと感じた生徒が８割以上である。				
		地域の理数教育拠点校	①小学生にサイエンスの楽しさを伝えるため、生徒自身が体験した国内 F.W の内容を伝える。 ②中学生にサイエンスへの興味・関心を高めるため、「ASEP JHS」など、中学生プログラムを開催する。	①アウトリーチプログラムへの参加者数は１５０名以上、内容に満足した参加者は６割以上である。 ②「ASEP JHS」の内容に満足した参加者は６割以上である。				